

地球

第五卷 第五號

大正十五年五月一日

人文地理學上より觀たる日本の都市（上）

小川 琢 治

一、村落と都市、都市化作用

村落及び都市の成立と發達は人類の地球表面上に活動する現象の中最も顯著なものゝ一である。その發達の趨勢を知るには數年乃至十數年を隔てた地形圖を對比すれば十分で、地形圖上の聚落發生を追跡すれば現在の日本に於ける人口密度の變化しつゝある状態を容易に看取し得る。此の變化は交通の不便なる田舎から都市に近づくに従ひ大となり、特に六大都市、府縣の中心を成す都市又は港灣其の他交通の要衝に當る處等の周邊に於て驚くべき急激なる經過を示し、現在の日本に起りつゝある所の田園生活から都市生活に遷り行く一般的趨勢を指示する現實の形相を成してゐる。此の人文地理學的手續は之を呼んで村落の都市化作用 Urbanization of villages と云ふべきものである。

抑人類の地表に於ける分布には人類が動物と共通に有する可動性に起因する分散 *Dissemination* と聚合 *Agglomeration* との相反對した舉動が行はれ、その結果として箇々の地域及び地區内に一定の密度を有する居住が成立する譯である。前篇に述べた越中の孤立の莊宅及び大井川新開地の農家の如きは分散作用の固定した形跡といつてよいかも知れぬ。是は人類の原始的の土地占有を表徴する村落の形式であると同時に、散布農村となつて地形圖に現はるゝ面白い實例である。

之に反して聚合は人類が社會的動物たる本能的舉動の表現に外ならぬから、之を妨害する重大な理由のない限り大抵の場合は常に認められる所で、村落の成立そのものが此の手續であり、都市の成立はこの作用の更に進んだ階段に過ぎぬといつてよい。

此の如き次第であるから越中射水川の洪涵地に存續する莊宅と井波その他の町や駿河大井川の新開農村と島田藤枝等の町の間には人口密度の局部的分布に著しい差異がある譯で、地形圖上にその對照が明瞭に認められ、現場を目撃すればその風景にも面白い特色が認められる。

聚合の増進はまた生活の仕方にも變化を與へ、生業の分化作用は之に伴ふて起る。耕して食ひ織つて衣る自給自足の状態は小さい農村に行れるが、聚合により戸數が増加すれば特殊の技藝により器具を作る工人や土地に産せぬ物品を賣る商人などが各獨立して生活し得る。若干の農村の間に此の如き生活の必要品の供給地が發達して町となり市となつて或る地區の生活が安定に愉快に營まれ

るのである。此の如くして發達する都邑は一地區の物資集散に必要な交通の便が大なるだけそれだけ大きくなる可能性を有し、従つてまた交通線の發達により左右さるゝは當然で、接近した都邑の一角が榮え一角が衰へるのも亦た交通關係の變化に原因することが多い。

村落と都市との間に戸々の生業に此の如き差異があるから、その住宅も亦た全く構造を異にし、農村の宅地に見る所の、厩、納屋、中庭等の如き耕作と收穫に限り必要な部分は半農半商の家にのみ残ることになり、居住の形相が大に趣を異にするは自然の成行である。

然れども村落が都市化するに當りその原始的特性が悉く消滅するものでない。注意すればその家屋の構造排列等に一定の地方的特色を保持する場合を發見し得る場合が多い。藤田文學士の前號(第七版)に掲げた龜岡市街の妻入り農家の家屋構造が草葺屋根から瓦葺屋根に變つたまゝ留つてるのはその一例である。此の型式の農家は近畿には尙ほ處々に睹られ、紀州街道に當る和泉信達村といふ街道村などは全く同一の構造と排列を呈して著しく人目を惹くものである。

近畿地方に條里の區劃の名残りを示す垣内式村落の周圍に見る所の堀の如きも更に發達して平野郷の周邊のものとなり、舊堺市が要津として勃興した頃までも續いたらしく、地形圖上に今尙ほその五角形の塹壕を留め、中歐の中世城郭に見る所のものと類似した形相を留めたのは他の一例である。

以上は一地區に於ける人口聚合の自然徑路を辿り都邑の發生する常例であるが、而かもその聚合

を促す原因は頗る多種多様で、原因の異なるに従ひ形態上の差異が認められる。

然れども此の問題に入るに先ち都邑都市等の語源と東亞大陸に發達した此の如き聚落の中心の起源と語源とに就いて一言せねばならぬ。

二、都市の起源と語源

居住に關する語源を考ふるに元來村(ムラ)は和名抄に「ムラ」「サト」即ち聚落なりとし、人家の若干の群即ち「ムレ」に通じ、朝鮮語と語源を一にするものである。之に對立する「マチ」は和名抄に坊に作り、今の通用する町に同じく「マチ」の訓はあるが、是は和名抄に「田區也」といひ漢字固有の耕地の區劃に限り用ゐられた文字で、後に奈良平安等の區劃たる坊の「マチ」に混用したものである。

都、都會、都邑等の古い語源に溯つて考ふるに、日本語の「ムラ」に相當する漢字は邑で、漢許慎の説文には邦の字と共に之を國と同義とし、鄭玄の周禮註には「邦之所居亦曰國」といひ、逸周書の作雒解に周公の「及將致政、乃作大邑成周于土中」といふ文は大邑成周を天下の中央に作る意味で、之を西方の鄴鎬と區別して雒邑といひ、前者は又た西邑と呼び、何れにも首府に相當する意には未だ用ゐられてゐぬ。

邑の古音を考ふるに^イび又は^ウび^イで今の山東省にゐた郁夷、郁州の郁と同音であつたと想はれ

る。遼東に後世まで残つた挾婁種族が遼西の地名として先秦から有名な醫巫閭、醫無閭、卜廬、無慮等と同名なるは明かで、山東にも春秋時代に牟婁といふ附庸國がある。此等を通觀すれば邑の字は此の牟婁と關係ある語で、日本語の「ムラ」とも亦た根源の同一であつたことを想像せしめ、又た一方では今尙ほ甘肅省の北境外に亦不拉山の如き地名の存在する事も參照すれば、邑なる語は周人の西方から來た時にその地方に行はるゝ聚落に關係ある地名を東方へ傳播せしめたかと想はせる。此の如く推測すれば人種の如何とは別に考へて聚落を表はす「ムラ」即ち邑なる語の非常に古く且つ分布の廣いことが想像されて面白い。

周以前の殷代に溯れば毫といふ處に都したといひ、屢々遷都が行はれたといふことは殷本紀に見えてゐる。然るに乍此の毫といふ地名は又た薄とも薄姑とも蒲姑とも蒲吾とも綴つたらしく、此の如き字で示す地名は處々に發見され、一つの邑に相當する普通名詞で、陝西から甘肅地方に分布する所から考へて、殷人も周人と同じく甘肅方面に郷土があつて、東方に移住して夏后氏に代つたと想はれる。此の考證は目下印刷中の内藤(虎次郎)博士還曆紀年の論文集に先秦時代の西北支那蕃族考中に詳述した如く、恐らくは今も新疆の準噶里語地名に見るバグ Bag に相當するらしい。此の語は探檢家ヘイン氏は之を Garten, Dorf と解し、何々バグといふ聚落があるから推せば、バグは沙漠に近い地方の樹木のある居住に適した處に起つた聚落であると想はれる。

説文毫の字を検するに「从高省、毛聲」といひ、高には「凡高之屬、皆从高、小堂也」といひ、亭には「民所安定也、亭有樓、从高省、丁聲」といひ、毛の字は宅託等に結び付いて寄り安んずる意義を有し、宅は「人所託居也」と解してゐる。故に毫の字にも建物のあつて人の託居する所即ち家屋と宅地とを含む「住宅」の意義があると思はれる。想像を違うすれば殷人の毫といふ居住状態は或は莊宅式に孤立したものがあつたかも知れぬ。従つて周人の邑が若干の住宅の聚合を意味するに對して毫はまた聚落といふ語を適用し難い原始的居住状態に在つた頃に起り、支那本部に入つて強大な外來民族となつて殷墟の如き都を建てるに至つても故語がそのまま殷人の首府にまで慣用されたといふことも出来るかも知れぬ。

都の字が首府 Capital 又は Metropolis の意味に用ゐられたのは秦以來のことである。後にも都は首府以外の市街地に用ゐられてゐる場合がある。周代ではその東西兩首府を成周及び宗周と呼び、之に王城といふ普通名詞も用ゐた。都の方は王城又は公侯以下の城に對して都城と呼び、領分内の稍遠隔の處に宗室宗族をして居らしめた大邑に用ゐ、春秋時代には此の意味以上に出でぬ。左傳莊公二十八年に「凡邑有宗廟先君之主、曰都、無曰邑、邑曰築、都曰城」といひ、隱公元年に鄭莊公が弟の共叔段をして京に居らしめ、之を京城大叔と謂つた時、祭仲が莊公を諫めた語に「都城過百雉、國之害也、先王之制、大都不過參國之一、中五之一、小九之一、今京不度、非制也」といふのは此の

意味である。

同じく定公十二年に魯の桓公の三子孟孫叔孫季孫三家の邑成邱費を三都と呼び、孔子の弟子子路が季氏の宰となり之を墮たんとした時、公歛處父なるもの、語に、「墮成、齊人必至于北門、且成孟氏之保障也」といつたので、成の魯の北境に在つて齊國からの侵入、防ぐ出城であつたことが明かである。

周禮司馬法等の諸書は何れも國即ち王城を距る五百里を都とすといひ、王城から遠い處とのみ解してゐるが、その意義は甚だ不徹底である。説文も亦た左傳と周禮との兩義を採用し、唯だ「从邑者聲」といふに止る。然れども音と義との聯絡を考ふれば、都と同音の堵の字が城壁を意味し、者に土を加へたものと邑を加へたものとに共通な意味は城壁なるべきを推知するに足り、都の古い意味は單に城壁を繞らした邑で、春秋時代にはその稍大きなものを都と呼んだとされる。

然らば都が首府と同義の語として用ゐられた徑路は如何。此の字が史記秦本紀に見えるのは孝公の「十二年、作爲咸陽、秦徙都之」といふに始まり、同始皇本紀三十五年に「於是始皇以爲、咸陽人多、先王之宮廷小、吾聞周文王都豐、武王都鎬、豐鎬之間、帝王之都也」といふ時に明かに帝王の居る處をも都といつた。是は孝公の尙ほ周室を認めてゐる時に用ひた語をそのまま套襲し、矢張り城壁を繞らした大邑の意味を出でななものである。その後秦に繼ぎ漢高祖が皇帝と稱するに及

び更に此の語をも襲用したもので、司馬遷が史記を書く時にも項羽が秦を破つて功勞あるものを王とするに當り、項羽以下皆な某王とし某處に都すといひ、皇帝の居處として區別せなんだことが明かである。

顧炎武の日知錄(卷二十二)に都を考證して、王莽が雒陽を新室の東都とし長安を西都とし、後世之に因り遂に古の下邑の名が今代京師の號となつたといつたのは此の用語の變遷を明にした創見である。

三、築城市街

都が城壁ある邑たる關係から考へて面白いのはピユツヘルの國民經濟成生論の第十章五千年間の大都市型式篇で、此に記載した西亞及び北弗の未開文化時代から、大抵武力を用ゐて征服者の造つた首府が此の型式を成し、サハラ沙漠中に墟址となつたものも、バビロン、ニネブエ等のメンボタミア兩河間の平野に興亡を経たものも、支那の王城と大同小異である。前に述べた武王の遺志を成就する爲めに周公の造つた大邑成周は「城方千七百二十丈、鄼方七十里、南繫于洛水、北因于邠山、以爲天下之大濬」といひ、一方里以上の王城の外に外郭を繞らし、その面積は少くも五十方里位あつたかと想はれる。之をヘロドトスの記載した方百二十スタディア五〇〇方籽のニネブエに比すれば

殆んど二倍の面積を有するのである。

地中海文化民族希臘羅馬等の間に行はれた都市に繞らした城壁の構造に關しては、羅馬時代の Vitruvius の建築論

Vitruvius: Marci Vitruvii Pollionis de Architecta, libri decem (the Ten books on Architecture. Engl. transl. by M. H. Morgan. Harvard Univ. Pr. 1914)

に詳細に記載され、戰國時代に支那に行はれた所に關する墨子の記載と共に、東西兩文化地域に於ける都市を研究するものゝ大に參考すべきものである。

外敵の防禦を目的として造られた此の如き市街地は西洋では中世に行はれ、獨逸のニユルンベルグの如く今尙ほ原形を存し、首府としては巴里が最も廣大なるその例である。東亞では支那朝鮮に最近まで行はれ、支那の府州縣盡く城を成し、且つその形狀が南北に延びた長方形なる場合が多い。その最も廣大なのは北京で、南北に長い内城と東西に長い外城から成り立ち、大なる城門を通じて出入する外ないことは二千餘年の昔と變らぬ。

此の型式をそのまま輸入したのが奈良(平城)京都(平安)兩京の都市計畫であつて、奈良は全く荒廢に歸して原形を留めぬが、京都のみはその左京が今の方格狀の規則正しい市街地に舊觀の一部を存してゐる。然れども此等の都市に繞らした垣は大陸に於ける外寇の侵入に脅かされる危険のない

日本に何等の防禦の必要がなかつたから、決して彼に見る如き大規模の築城でなかつた。此の點は大陸と我が島國との顯著な差異である。

奈良平野その他の條里を設けた遺跡の村落が垣内式村落として現存するのから推せば、平安朝以前の國府の所在がまた大陸の府州縣治の如き小都市即ち築城市街地の型式に従つたであらうと想はれるが、同一の理由で立派な城壁などを設けなだものと見え、何處にもその遺跡を認めることが出来ぬ。

抑々城壁の形と之を組立る材料との間には自から離れ難い關係があるもので、メンボタミや支那の如き平地に起つた都市では石材に乏しい爲に輒即ち煉瓦が發明されて之に代り、その規則正しい方形が城壁の形にもなるのが當然の順序で、之に反して自然石を用ゐ得る山地では朝鮮の城壁の如く不整な圓味を帯びた城壁の輪廓も生ずるのである。日本の古代では防禦の必要から造つた城壁の遺跡は全くなく、東北經略に當つて蝦夷種族の居た奥羽に設けたものが柵であつたのから推せば恐らくは大陸の如き築城は行はれなだかも知れぬ。何處か國府又は國衙の遺跡を詳細に調査してその舊形を確知したいものである。

此の如き都市たること疑なき一例は堺市なることは前篇に述べた如く、その特色は壘壕の遺跡が明瞭に保存されてる點にある。國衙なども恐らくは何か此の如き特色が認められるならば案外容易

に古い輪廓を追跡し得るであらう。

四、城下町

此の如き都邑の外邊を決定する築城と趣を異にしたものは、地方大小名が割據により戰國時代以後に發達した城下町と呼ぶべき都邑である。此の型式は大は江戸名古屋その他の諸大名の居城あるものから、一二萬石の小諸侯の城下に至る間に大小の差等の著しいのは勿論であるが、その固有の性質は天守閣本丸外廓から成つた城主従士の居宅を圍む城池と之を繞つた商工人の市街地とから成立つことである。城そのものは幾つかの方形を組合せた多角形の輪廓を有するも、之に附隨する市街地の形狀は土地の狀況如何によつて種々雜多であるを免れないのを常とする。

城下町の位置を決定した主要な因子は要害即ち戰略地理學上の地形である。鎌倉幕府時代の地方豪族足利氏の足利、新田氏の太田の如く背面に山を負ふた館又は屋形を作つてあたに過ぎなならしく、戰國時代以後に築城術が長足の進歩を成して今日處々に見る所の城下町の發達を遂げたのである。此の間に山地の地形を利用した山城から平地に多大の人工を費した平城に進歩して都市の生長を許すに至つたが、それでも尙ほ平地に屹立した小丘に天守閣を設けて平地を瞰制し得るの地利を占めんとした場合が多い。姫路和歌山の如きはその好例で、恐らくは墟址のみを留めた安土城に

濫觴したものであらう。

容易に徒渉し難い河流も亦た防禦線として戰略上重大なる意義を有するから、之を利用することが選定の目安となるのが當然で、今日城下町には此の點が明瞭に認められるものがある。關東平野の水戸は平坦な地勢の處で僅かに那珂川と千波沼との間の臺地を利用したその一例である。

幾多の城下町中大阪と東京とは獨りその日本最大の都市たるのみならず、その市街地の成立の根底に於て他の城下町と全く趣を異にし、且つ相互の間にも著しい差異がある。大阪は一條の洪積層臺地の天王寺の北に突出して淀川に臨んだ要害に據つて造られた石山寺から出發し、その西方に長方形に近い幾つかの外城濠を設けて平安京に近い格子狀の市街地を發生し、河海運漕交通の便を併有して終に現狀に達し、豊臣秀吉の大陸發展の偉圖をも起さしめた。

東京市街の之と著しく形狀を異にするのは將軍の居城を大中心とした外に、諸大名邸がその周圍に配置されて各小中心を成し、他の城下町の單心的なるに對し多心的なるが爲め、大邸宅を圍んでその周圍に町屋が出來て、大阪の格子狀市街に對して挽き白の目狀の如き放射狀の市街を成すに至つたのである。此等の大邸宅の一部は早く開放されて住宅地となつたが、離宮御用邸官衙學校公廠外國使臣館等に舊輪廓の一部を留め、都市計畫の遂行に頗る困難なる現狀を成してゐる。

城下町の一地方に於ける地理的位置は封建時代から地方行政の中心たる歴史を有し、大藩の場合

は名古屋金澤仙臺廣島等の如く三百年前から既に立派な都市を成し、維新以後行政軍事商工業等の中心として更に十萬乃至數十萬の大都市に發達したものである。之に反して此の如き大中心の存立に不適當で、小藩に瓜分した大分宮崎兩縣の如き處では今尚ほ五萬以上の都市が出來ぬ場合もある。故に日本の都市中に於て城下町は最も重要なもので、その歴史的關係を無視しては人口聚合の手續を了解することが不可能である。

最後に一言せねばならぬことは城下町の封建時代三百年間に於ける生長である。平安朝の聚落數の稀少なりしに比して豪族の地方割據後に領土内の土地を開墾し外來の民口を吸収して富強の實益を收めんと努力したと想はれるが、徳川幕府の封建政治の下に分與された限られたる領土の富源を極度まで開發せんとする傾向甚だしくなつて、周約的農業が遺憾なく普及した。大名の公稱石高とその實收入との間に大きな開きがあるを常とし、その或るものは織豊兩氏の分配當時面積の正確な測定を缺いたのに歸因するは勿論なるも、その大多數は分封後の銳意經營した結果大に發展したものである。

城下町の考察は詳細に涉れば尙ほ此の外に種々の面白く且つ有益なる事實があるが、暫く是にて了り、次に他の要因によつて起る都邑を一看する。